

高賛侑監督制作ドキュメンタリー映画 『ワタシタチハニンゲンダ!』 上映会&尹玲花医師の対談企画報告

永 田 貴 聖

2023年4月に開催されたキリスト教文化研究所所員会議で高賛侑監督制作ドキュメンタリー映画『ワタシタチハニンゲンダ!』上映会を実施する方向がほぼ決まった。そして、11月10日日本学にて映画上映会と対談が実現した。この映画は、在日コリアン2世である高賛侑監督が制作した映画で、在日朝鮮人からはじまる外国人移住者の権利への制限、強制送還が規定されてしまった日本の難民関連法に関することから、現在問題となっている出入国管理庁の収容施設に入れられた外国人移住者の人権侵害的処遇や暴力に焦点が当てられている話題作である。特に、2021年3月に名古屋入管に収容されていた30代のスリランカ女性が死亡した事件を中心に出入国管理庁の外国人管理への問題を告発している。

私は残念ながら、現在の日本社会からは政府や行政に批判的な意見を表明することを避ける風潮が日に日に強くなっていると感じている。そのような風潮を考えると、この種の映画の上映には「自主規制」がかかるのではないかと懸念があった。しかし、提案してみると、所員の先生方はむしろ、「やってください!」という声が大半であった。これは非常に喜ばしいことであった。同時に、私はこの映画の企画を実現しなければならないという責任を負うこととなった。懸念が去り、また別の重圧がのしかかった。威勢よ

高賛侑監督制作ドキュメンタリー映画『ワタシタチハニンゲンダ!』
上映会&尹玲花医師の対談企画報告

く、企画を提案するものの、この種の重圧にはなかなか慣れることができない性分である。とはいうものの弱音ばかり吐いているわけにはいかないの、肅々と準備にとりかかることにした。

この映画の上映会を行うきっかけになったのは、2023年2月頃、高賛侑監督と長年にわたり懇意にしている知人から、「どこかでこの映画の上映会ができないだろうか?」という相談であった。わたしはこの映画の内容には大変興味あったので、その友人には「一応、提案してみる。」と返答した。思ったらすぐに行動である。できるかどうかは別として、提案するぐらいはよいだろう。最初はそんな軽い気持ちだった。映画の中身とは正反対である。この知人とは京都市東九条地域で20年以上にわたって続けられている朝鮮半島の農楽を基盤にした祝祭活動である「東九条マダン」を通じて知り合った。「東九条マダン」は、京都駅の南側に位置する在日コリアンの集住地域であり、現在でも人口の約1~2割が在日コリアンと言われている、戦前期に労働のために日本に移住した朝鮮半島出身者たちが集まってできた街である。1970年代後半までは開発が遅れ、生活環境が劣悪であった。1980年代後半以降によりやく街づくり進んだ地域である。この進展には、多くのキリスト者が貢献をしていることを忘れてはならないだろう。現在、「東九条マダン」はこの地域で在日コリアンと日本人、他の外国人移住者が交流する重要な機会となっている。フィリピン人移民の研究者である私は調査で出会ったフィリピン人たちが東九条や「東九条マダン」で活動をはじめたことをきっかけに彼らに誘われて関わるようになった。私は両親の代で日本国籍を取得した在日コリアンの家庭に生まれているものの、民族的なルーツをそれほど継承していないという意識もあり、フィリピン人の友人たちからの誘いがなければこういう関わりとは縁がなかったかもしれない。この様な機会の延長線上として、今回、高賛侑監督との出会いがあった。

そして、上映会を行う上で大きな助けとなったのは、本学一般教育部の松

高賛侑監督制作ドキュメンタリー映画『ワタシタチハニンゲンダ!』
上映会&尹玲花医師の対談企画報告

本周先生（キリスト教学）、間瀬幸江先生（フランス演劇）、早矢仕智子先生（日本語教育）の存在であった。松本周先生には、当日、高賛侑監督への指定質問をご担当いただいた尹玲花医師をご紹介いただき、準備、当日の進行と多大な貢献をいただいた。松本先生と尹玲花医師に改めて感謝の意を表したい。間瀬幸江先生には、研究所内のプロジェクトである「多民族における宗教と文化」の視点から企画の相談を行い、良い示唆をいただいた。早矢仕智子先生には、高賛侑監督、尹玲花医師と私たちの交流の場の準備や当日のお手伝いをいただいた。

高賛侑監督とは初めての出会いであったが、「東九条マダン」の関係者数名を通じて、間接的に存じ上げており、若輩者の私がこういうと失礼なのだが、当初から、親しくさせていただいた。高賛侑監督が高校時代までは在日コリアン2世であることを決して強く表明していなかったのがある先輩との出会いから、外国人への人権問題を行うようになったことをうかがったことである。さまざまな出会いが、大きな変化のうねりになることを実感できる機会であった。

この映画は、2023年7月には国際ニューヨーク映画祭のドキュメンタリー賞を受賞するなど、世界で注目されつつある (<https://ningenda.jp/uncategorized/603/> 映画ウエブサイトから 2024年1月3日検索)。東南アジアなどでも上映が行われている。高賛侑監督が対談の中でおっしゃっていた「この映画をみた以上はみなさんの日本の現状への責任があるので、そのことを忘れないようにお願いしたい!」という言葉が頭の中から離れない。最後に、高賛侑監督、医師の尹玲花先生をはじめとする関係者皆様に改めて感謝の意を表したい。